赤とんぼのはなし

赤岸幸輔

（一）

夕方ちかくなると、海の方から、赤とんぼが澤山とんできました。新吉が、自轉車に乘つて、走つてゐると、赤とんぼが、いくつも、いくつも新吉のからだに、衝突しました。坂にかゝつて、自轉車を押して、踏切まで來ると、海が見えました。

赤とんぼは、あちから、あちから崖の下から、湧くやうにとんできました。軒の下で、夕陽に羽根を、キラ〳〵光らせて、ふざけまわる蚊の群を、想ひ出しました。赤とんぼが、とんでくるやうすは、それに似てゐました。忙しさうに、わき目もふらずに、町の方へとんでいく赤とんぼもゐるし、道草をして、赤くなつた漆の葉のまわりで、おつかけつこしてゐるのもゐるし、くたびれて、線路や、枕木や、電線にとまつてゐる赤とんぼもゐました。

この赤とんぼたちは、どこで生れて、どこから來たのだらう——海からかしら。

海は、夕燒けでした。

海を見下す崖の薄は、金色に光つて、とんでゐる赤とんぼの羽根まで光つてゐました。赤とんぼは、夕燒けの海から、とんで來たのだ。夕陽で眞赤になつた西の海の中から生れたのにちがひない。だから赤とんぼのからだは、赤いのだ。新吉は感心したやうに、また、得意さうに、ひとりで頷きました。

新吉の自轉車の把手にとまつた赤とんぼは、羽根を、しづかにさげて、首を、ヒョコリ〳〵と曲げました。それは、夕陽に赤く照らされた新吉の顏を、見上げてゐるやうでありました。

（二）

五年の男子のきばせんがすんで、いよ〳〵新吉たち二年生のつな引がはじまりました。おんがくに、歩てうを合せて行進してくゐ赤組の一番せんたうが新吉でした。新吉は、赤かつやうに——、白かつ

やうに――のおうえんのこゑで、ぼうとしてしまひました。このさわがしいおうえんのこゑは、夏の海水よくじようのさわがしさに、にてゐると思ひました。「全たーい　とまれ」先生のごう令で新吉は、白組の山下君と、福田君と向ひ合つてとまりました。むねが、どき〳〵しました。空を見ました。青くて、高い空でした。赤とんぼが、のんきさうに飛んでゐました。「ようゐ――」みんなは、つなをしつかりにぎました。新吉は、山下君のほかが、まつ赤になつてゐるので、おかしくなりました。さあドンのピストルがなるぞと思つた時、新吉は、赤とんぼが、つなにとまらうとしてゐるのに氣がつきました。赤とんぼは、新吉の手から、三十糎ぐらゐ先のところで、つなにとまらうか、どうしようかと、考へてゐるやうに、ちよつとつなに、さわつては、飛び上り、また、つなにさわつては横の方に、にげだしたりしてゐました。ドンのピストルがなりました。運動會は、このつな引がすんで、おひるです。赤かつやうに――白かつやうに――先生たちも、赤はたや、白はたをふつて、おうえんをしました。新吉はおーえす、おえーす、とこゑをはり上げて、つなを引きました。赤組がおーえす、とつなを引くと、白組は、少し引つぱられ、白組が、おーえす　と引くと、赤組はずず　と引つぱられました。つなの眞中に結んである赤いひもが、白組の方にいつたかと思ふと、赤組の方に、もどされました。だれもむちゆうでした。

白組に引かれて、新吉のからだも、ぐ、ぐと引かれました。負けるものか、新吉は、心の中でさけんで、「おーえす」と引つぱらうとした時、赤とんぼが、新吉がつなをにぎつてゐる手のすこしさきのところにとまりました。赤組に赤とんぼ、赤組に赤とんぼ―新吉は、「おーえす」といふかはりに、赤とんぼー、赤とんぼー、といひました。新吉のにぎつてゐるつなが、ゆるくなつたと思たら、赤組が、うしろの方へ、ひつくりかへつてしまひました。ピストルが、ドンとなつて、わあとーいふさけびごゑが上りました。赤組が勝ちました。新吉は空を見上げました。つなにとまつた赤とんぼは、びつくりしてどこかへにげていつたやうでしたが、さつきとおなじやうに、赤とんぼたちは、いくつも〳〵運動會をみてまゐした。新吉は、赤とんぼのおかげで、赤組が勝つたのだと思ひました。

赤組は、ばんざーいをさけびました。